

琉球語研究における系統樹研究の可能性

狩俣繁久¹

1. 琉球語研究の課題

沖縄学の父と呼ばれ、沖縄研究に多大な功績を遺した伊波普猷（1876～1947）は、日本に組み込まれた故国琉球が日本とどのような歴史的関係にあるかを明らかにするために、言語、歴史、民俗、文学など様々な側面から研究を重ねた。戦後の沖縄で琉球語研究の端緒を開いた仲宗根政善（1907～1995）は、琉球列島各地の方言を調査しながら、自らの故郷の今帰仁村与那嶺の方言を明らかにすることに心血を注ぎ、与那嶺方言の音韻、アクセント、文法を記述し、1万5千語を収録した『沖縄今帰仁方言辞典』1983を刊行し、故郷の今帰仁与那嶺方言全体を記述した。宮良當壮も中本正智も故郷の言語の解明が基礎にあった。琉球語研究は、琉球語の正体を明らかにすることであった。

琉球語の音韻、アクセント、文法現象の解明は進み、琉球語が日琉祖語から分岐した言語であり、琉球語が日本語史研究にとって重要な位置を占めることを疑うものはいない。しかし、これまでの多くの研究は、奈良期中央語と琉球語の一部の下位方言の比較研究が中心で、少数語彙と特定の音韻現象を指標にした研究であった。琉球語が日琉祖語から分岐したのち、琉球列島の島々に伝播し、それぞれの地域で独自の発展を遂げてきた過程の詳細な検討は遅れている。琉球語の下位方言間の歴史的関係や階層性にも不明なことが多い。

琉球祖語を保持した人々は、いつ九州から琉球列島に渡ったのか、その人の移動の規模や回数はどうだったのか。琉球列島の最南端の波照間島や最西端の与那国島への渡海の時期や規模等、琉球語内部の拡散や発展の過程の解明も遅れている。隣接する九州方言との強い関係も示唆されるが、九州琉球祖語に遡る特徴と、1609年の薩摩侵略以降の影響の分別も十分になされていない。言語は分岐するだけでなく、接触しながら影響を与え合っていて、それらが複雑に混じりあって個々の方言を特徴づけているのであるなら、さまざまな言語接触が個々の下位方言にどのような影響を与えているのか明らかにしなければならない。

琉球語研究の大きな課題は、琉球語に関するこれまでの蓄積を活かして琉球語全体を鳥瞰し、琉球語全体を体系的、総合的に検討するための足場を組み立てること、個々の下位言語、下位方言をより上位の方言群の中に位置づけながらその特徴を明らかにすること、それらが形成されてきた要因と過程を明らかにすることである。

2. 北琉球語と南琉球語の言語差

音韻、文法、語彙に関する研究の進展によって琉球語の実態が明らかになるにしたがって、琉球語を北琉球語と南琉球語の二つに区分する研究者が増えてきた。

南琉球語には平安時代に発生した音便が見られない。いっぽう、北琉球語には九州方言と同じ音便が見られる。そのほかに、アスペクト・テンス体系を構成する動詞の形式およびアスペクト的な意味、中止形の形式など、北琉球語と南琉球語の間に大きな違いがみられること、北琉球語の特徴が九州方言と共通することから、狩俣繁久（2018）は、南琉球語には奈良時代以前の特徴を保持する言語が伝播し、北琉球には平安時代以降の言語が伝播したことを論じた。

狩俣繁久（2019）は、語彙の面から北琉球語と南琉球語で異なる「米」「稲」「飯」「鎌」を検討した。表1に示したように、南琉球語は、稲と米を区別せず mai 系の単語が現れる。北琉球語は、稲

¹ 琉球大学 島嶼地域科学研究所。

と米を区別して*ini系の単語と*kome系の単語がある。

北琉球語の中の沖縄本島北部の国頭村、大宜味村、東村、今帰仁村²、本部町の方言でも稲と米を区別し、米には*kome系の単語が現れるが、稲には南琉球語と同じ*mai系の単語が現れる³。沖縄本島の北に位置する与論島の城方言では稲と米を区別しない mai が現れる。稲や米に関連する単語として「鎌」の語形も検討したが、北琉球語で kama 系の単語が現れ、南琉球語で irara 系の単語が現れる。北琉球語の中の沖縄北部地域から南琉球語と同じ irara 系の単語が現れる。

以上の事から、狩俣繁久(2019)は、南琉球語と北琉球語の違いが九州からの大きな人の移動が2回あったことに由来するという仮説を提起した。

- (A) 音便の起きる前の活用形とシアリ中止形を保持し二項対立型のアスペクトの言語(九州琉球祖語)を使用する人々が南九州を離れ、奄美諸島、沖縄諸島に拡散した。
- (B) その言語には、*pise(暗礁・干瀬)や*kanoku・kaneku(砂地)の単語があった。
- (C) その人々は「稲」と「米」を区別せず、*mai(稲)を栽培して*irara(鎌)を使って*mai(米)を収穫する人たちだった。
- (D) 最初の南下から時を経て慶良間ギャップを越えて宮古諸島、八重山諸島に渡った。
- (E) 最初の渡来から大きく遅れて、音便化した活用形とシテ中止形を持つ、三項対立型のアスペクト体系の言語を保持する人々が九州から再び渡来してきた。
- (F) *ine(稲)を栽培して*kama(鎌)で*kome(米)を収穫する人たちの言語は、奄美大島から沖縄永良部島までの言語に大きな影響を与えた。
- (G) 与論島から沖縄北部までの地域では、収穫物であり貢納物でもある米には kome 系の単語使用に替えたが、栽培植物としての稲には mai 系の単語を使用し続けた。
- (H) 沖縄中南部地域では*ine(稲)を栽培して*kome(米)を収穫したが、*irara(鎌)を使用した。この地域にはシアリ中止形とシテ中止形が併存し、二項対立型と三項対立型のアスペクトが混交した言語となった。

表1. 米、稲、関連する単語

	米	稲	米の飯	鎌
大和村大和浜	kumi	?ni:	?obaN	kama
徳之島町母間	kumi	?ini:		kama
与論町城	mai	mai	mai	hama
沖縄今帰仁与那嶺	humi:	me:	me:	hama:/ira:na
沖縄那覇首里	kumi	?Nni	me:/?ubuN	?irana
宮古島市平良下里	maz	maz	maz	zzara
八重山石垣市石垣	maŋ	maŋ	maŋ/NboN	gagŋ
与那国島祖納	mai	mai	mai	irara

狩俣繁久(2018)と狩俣繁久(2019)が異なる特性を持つ文法と語彙を扱っているとはいっても、限られた項目しか検討の対象にしていない。狩俣の提起した仮説を検証するには、検討対象の項目を増やし、いろいろな面から検討しなければならない。他の下位方言の正体を明らかにするときも

² 今帰仁村与那嶺方言では、me:hai(稲刈り)、me:gadʒimi(稲叢)等の複合語の構成要素としても me:(稲)がある。

³ 名護市史編さん委員会編(2006)、pp.332-333、pp.492-493を参照。

同様に、音韻、語彙、文法の各側面から検討しなければならない。

3. 特徴的な下位方言

これまでの多くの研究によって、琉球語が島ごとに、あるいは地域ごとに変異の大きな、多様な下位言語、下位方言によって構成されていることが知られるようになってきた。しかし、近接する方言間の異同を含めた関係や個性的な下位方言の生成された要因やその生成過程などの説明は遅れている。

奄美大島と加計呂麻島、徳之島の諸方言は日琉祖語の *p を h に変化させ、*e を i に変化させ、二重母音 *ae、*ai を ë に変化させた、短母音 7 個の母音体系で、奄美德之島諸方言として一つの方言圏にまとめられる。奄美大島の最北端の笠利町佐仁方言は、i、ë を有する点では他の奄美德之島諸方言と同じだが、日琉祖語の *p をよく保存し、*a、*e、*o に先行する *k を摩擦音 h に変化させている。*p を保持し *k を h に変化させる特徴は、喜界島方言、与論方言、沖縄島北部方言と共通する。佐仁方言は他の奄美德之島方言には見られない鼻母音 ǝ、ã、ĩ ē を有する。音韻的特徴から見ると、佐仁方言は“言語の島”として知られるが遠く離れた喜界島方言や沖縄北部方言と共通の特徴を有するのは何故なのか、未解明である。

奄美大島南部の瀬戸内町の諸方言は、k'up (首)、mit (水)、ʔok (扇)、ʔapra (油) のような子音で終わる閉音節構造の単語を多く有する方言として知られている。瀬戸内町は、リアス式海岸の入り組んだ陸上交通の不便な地域であり、しかも大島海峡を挟んだ大島側と加計呂麻島側に分かれているにも関わらず、奄美大島南部方言は、全体として方言差の小さい方言である。瀬戸内町の方言は、一つにまとめられ奄美大島南部方言を形成し、瀬戸内町以外の笠利町、龍郷町、名瀬市、旧住用村、旧大和村の方言と大きく対立する。

奄美大島に似た山がちな地形の沖縄島北部国頭村、大宜味村には方言差の大きな下位方言が点在する。奄美大島南部の諸方言の方言差が小さく、沖縄北部の方言差の大きいのは何故か。奄美南部と沖縄北部の違いはどこから来たのか、未解明である。

沖縄島中南部地域には、広い範囲に方言差の小さい下位方言が分布している。この地域では有力な方言が短期間に拡散した可能性を想定できるが、同じことが奄美大島南部にも想定できるのか。沖縄島中南部と奄美大島南部の二つの地域は同じことが起きたのか、未解明である。

沖縄島中南部方言と沖縄島北部方言の境界のすぐ北に位置する恩納村恩納集落の方言は、古代ハ行子音の p を保持する方言としてよく知られる。恩納村の北側の瀬良垣、安富祖、名嘉真の集落と共通の特徴を持ちつつ、恩納岳を挟んだ山の向こうの金武町や宜野座村との共通性も有するが、名護市以北のどの下位方言と比較しても破裂音が摩擦音化しない最も古い子音体系を有する。恩納村恩納方言の個性の発生にはどのような社会的、歴史的な理由があるのか、未解明である。

慶良間諸島の阿嘉島、慶留間島の方言は、ke: (木)、te: (手)、me: (目) などのように 1 音節語、あるいは長母音にかぎって e: が i: に変化せず、e: のまま保持されている。阿嘉島、慶留間島の方言は、susu (煤)、tsura (顔)、midzu (水) のように s、ts、dz と結合する u が保持されている。母音体系に関していえば、阿嘉島、慶留間島の方言は、北琉球語のなかでも保守的である。阿嘉島、慶留間島でこのような現象がみられるのは何故なのか、隣接する座間島、渡嘉敷島とは人の移動と交流に差があったのか。座間島、渡嘉敷島とは言語接触のありかたが違っていたのか。古形を保存する要因は何なのか、未解明である。

上に述べたことは、音韻的な特徴に基づくものだが、語彙や文法の特徴でも同様の現象がみられるのか、十分な検討はなされていない。

4. 琉球語研究における言語地理学

民間団体の沖縄言語研究センターは、危機的な状況にあった琉球語の記録・保存を計画し、つぎの5冊の調査票（以下、『基本調査票』）を作成した。

『琉球列島の言語の研究 第1調査票その1』1979年（以下、『その1』）

『琉球列島の言語の研究 第1調査票その2』1979年（以下、『その2』）

『琉球列島の言語の研究 第2調査票』1979年（以下、『第2』）

『琉球列島の言語の研究 第3調査票』1980年（以下、『第3』）

『琉球列島の言語の研究 第4調査票』1988年（以下、『第4』）

『その1』には、『国語アクセント類別対応表』の1音節名詞11語、2音節名詞20語、3音節名詞7語、その他の4語、計42語と助詞付の語形を得るための例文が収録されている。『その2』には、身体名詞と動物、植物などの名詞が198語収録されている。『第2』には、道具、自然、天体、時間に関する名詞と数詞が300語収録されている。『第3』には、親族名詞を中心にした人間関係の名詞と代名詞が197語収録されている。『第4』には、形容詞が135語、擬声擬態語が231語収録されている。『基本調査票』5冊には1103語を調査できるようになっている。

その後、琉球列島の伝統的な全集落の方言を調査する計画を追加し、『琉球列島の言語の研究 全集落調査票』1988年（以下、『全集落』）を作成した。『全集落』には、『基本調査票』から「その村落の方言の構造的な根幹をなす部分、すなわち、音韻体系の大要、もっとも基本的な、あるいは日常的な語彙」を精選し、「動詞形容詞の活用のタイプのおおよそ⁴」を知るための動詞と形容詞を追加して編集されている。見出し単語数は200語だが、1単語に複数の質問事項があり、総てを調査すると350項目（活用語の文法的な形をふくむ）になる。

沖縄言語研究センターは、琉球列島の100地点の『基本調査票』の調査と、全村落818地点の『全集落』の調査を行うことを計画し、1979～1992年に複数の外部資金を得て調査を実施した⁵。『全集落』628地点、『その1』99地点、『その2』114地点、『第2』82地点、『第3』61地点、『第4』56地点の調査結果が得られている。

対象とする地域の言語を俯瞰する方法として言語地理学がある。言語地理学は、言語現象の地理的な分布を手がかりに言語の変化と発展を空間の座標軸で研究する。言語がすぐれて体系的な構造をなす存在であるから、その調査項目も体系と構造を前提に選定される。沖縄言語研究センターの言語地理学的研究は、言語地理学と比較言語学を有機的に繋げた仲宗根政善（1937）の構造的比較言語地理学をひきつぎ、調査項目も体系的なアプローチを考慮して選定されている⁶。

名護市教育委員会編『名護市史—言語編』（2006）は、沖縄言語研究センターの『全集落』の調査結果⁷に基づいて、音韻14枚、文法（動詞20枚・形容詞5枚）、アクセント8枚の言語分野別に言語地図と、親族18枚、身体14枚、動物6枚、植物8枚、道具14枚、天体気象6枚、時間空間、数詞11枚、代名詞9枚9枚の意味分野別の言語地図を描いた。言語地理学から得られるものは大きい。しかし、言語地図は平面図であり、複数項目を統合して1枚の地図に描くのが容易ではなく、離れた複数の下位方言間の関係の把握も難しい。

⁴ OCLS（1992）『沖縄言語研究センター会報12・13・13号』の「琉球列島の言語の研究」進捗状況による。

⁵ OCLS（1981）『沖縄言語研究センター会報2』の「研究活動経過報告」、および、OCLS言語地理学定例研究会（1979）「琉球列島の言語の研究（10年計画）について」沖縄言語研究センター資料No.17を参照。

⁶ 琉球方言研究における言語地理学的な研究についてはかりまた（2009）を参照。

⁷ 沖縄言語研究センターの調査結果で言語地図を描いたものとして上村幸雄編『奄美諸島方言の言語地理学的研究』（1990）、高橋俊三編『琉球八重山方言の言語地理学的な研究』（2010）がある。

5. 琉球語の方言辞典

琉球語が日琉祖語から分岐して以降も、琉球列島と日本との間には長い交流の歴史があり、その交流の歴史が言語にも反映しているとすれば、琉球語と日本語との間に深い断絶があるわけではない。琉球語と日本語の間に引かれる境界線は、1本の線ではなく、九州からトカラ列島を経て琉球列島の間に、あるいは、琉球列島上にたくさんの線が引かれている。その境界線は、南下した人々の移動の軌跡、分岐後の言語接触の程度や多寡の差である。その幾重にも重なりあった薄皮を一枚ずつ捲って琉球語の生成と発展の歴史を解明しなければならない。

琉球語と九州方言の間の共通点には祖語に遡るものと分岐後の言語接触によるものがある。九州方言の琉球語への影響の強弱や多寡は、下位方言によって異なり、奄美方言で大きく、与那国方言で小さいことが予想される。九州琉球祖語の可能性や言語接触の影響の強弱や多寡を解明するには基礎語彙の比較研究だけでは不十分である。

幸いにして、1万語以上を収録した琉球語の方言辞典が10冊刊行されている。1万語未満の方言辞典と未公刊の方言辞典を加えると13冊になる⁸。鹿児島県の方言辞典も2冊刊行されている。これらをデータベース化し、全辞典を一括して、あるいは辞典間で、あるいは辞典ごとに(1)方言形による検索、(2)標準語形による検索、(3)意味分野別の検索、(4)キーワード検索などが可能になれば、琉球語内、あるいは、琉球語と南九州方言の比較歴史方言学的な研究も可能になる。

1. 『奄美方言分類辞典上巻・下巻』(長田須磨、須山名保子、藤井美佐子、1977、1980)
2. 『奄美竜郷方言辞典』(石崎公曹、未公刊)
3. 『与論島方言辞典』(菊千代、高橋俊三、2004)
4. 『伊是名島方言辞典』(伊是名村教育委員会、2004)
5. 『沖縄伊江島方言辞典』(生塩睦子、1999)
6. 『沖縄今帰仁方言辞典』(仲宗根政善、1983)
7. 『沖縄語辞典』(国立国語研究所編、1963)、
8. 『宮古伊良部方言辞典』(富濱定吉著、2013)
9. 『石垣方言辞典』(宮城信勇、2003)
10. 『竹富方言辞典』(前新透、2010)
11. 『与那国ことば辞典』(池間苗、1998)
12. 『種子島方言辞典』(植村雄太郎、2001)
13. 『鹿児島方言大辞典』(橋口満、2004)

6. 琉球語における系統樹研究

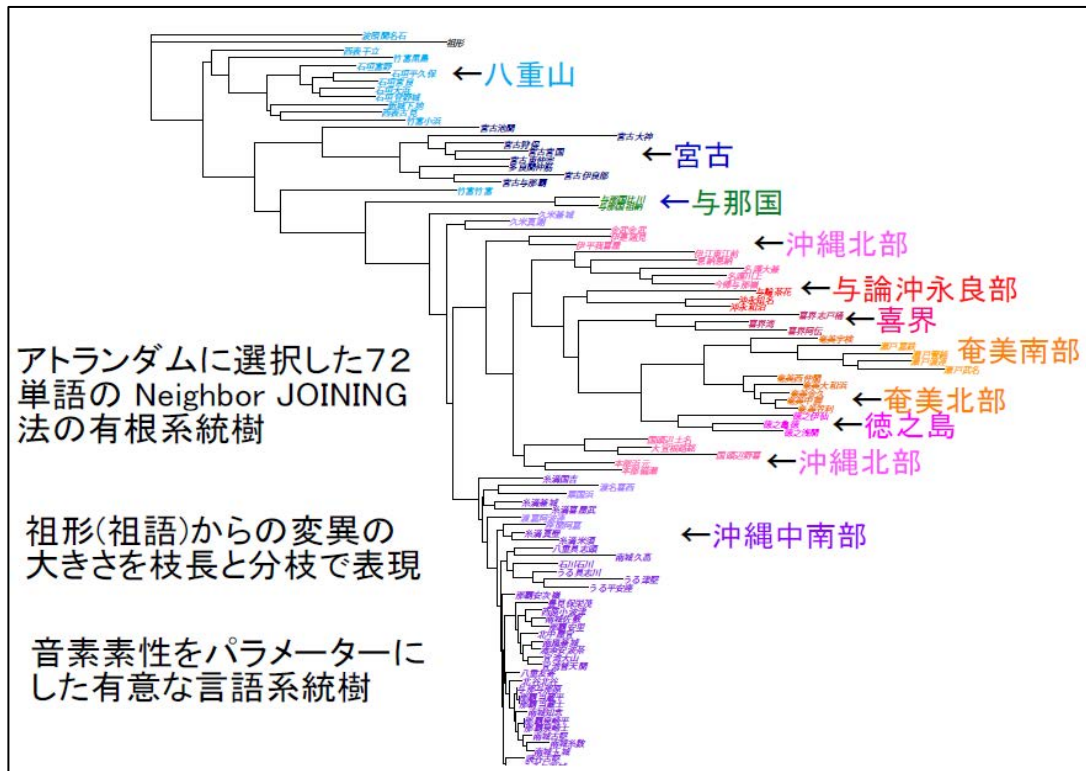
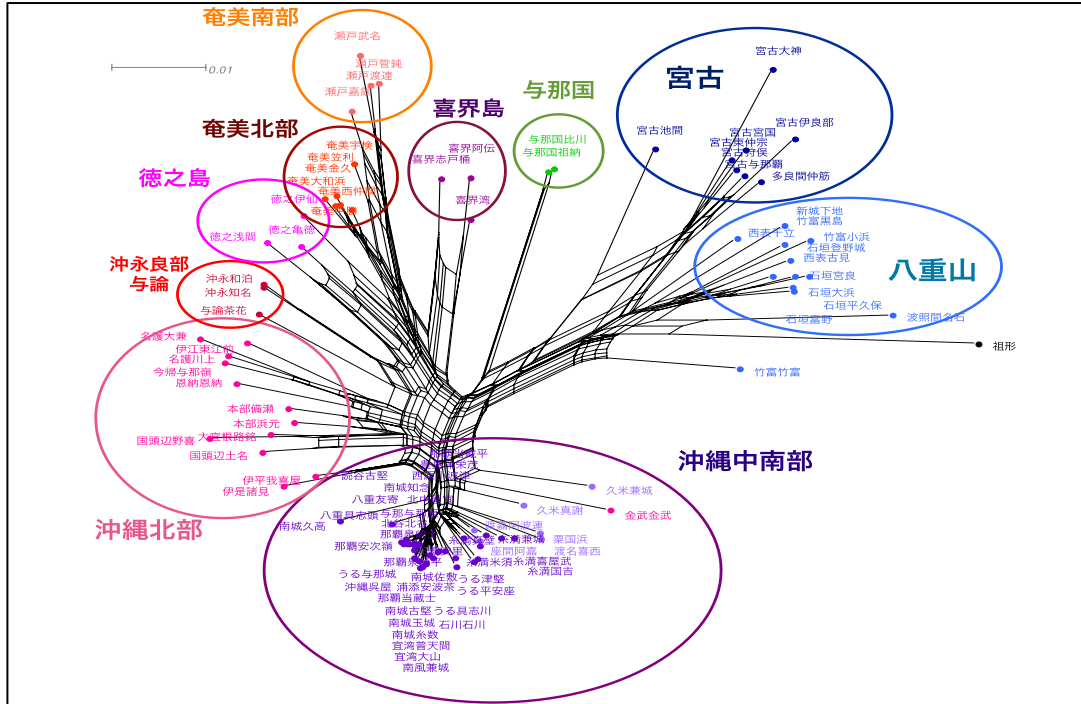
琉球語研究のこれまでの研究成果に基づきながら、沖縄言語研究センターの収集した『基本調査票』と『全集落』、13冊の方言辞典の単語を使用して言語系統樹を描き、比較歴史言語学的な研究を行なうことができれば、日琉祖語からの分岐と九州方言との交流の歴史も琉球語の下位言語間の分岐と交流の歴史も探ることができると考え、共同研究を始めた⁹。

⁸ 13冊のうち1、6、7に、宮古島平良下里方言の語彙を記録した『柴田武ノート』を「琉球語音声データベース」として音声付きの電子方言辞典を琉球大学附属図書館のIP上で公開している。さらに2021年度までに、2、3、4、5、8、9、10、11、12、13の方言辞典をデータベース化し、3、4、5、9、10、11の方言辞典については音声付電子辞書として琉球大学附属図書館HPで公開する準備を進めている。なお、未公刊のものとして『加計呂麻島諸鈍方言辞典』(金久正、未完)、『名護市幸喜方言辞典』(宮城萬勇)などがある。

⁹ 木村亮介(琉球大学医学研究科・ゲノム人類学)、岡崎威生(琉球大学工学部・数理統計学)、木部暢子(国立国語研究所・日本語学)、金田章宏(千葉大学・日本語学)、津村宏臣(同志社大学・空間情報科学)、下地理則(九州大学・言語学)、白田理人(志学館大学・言語学)、および、島袋幸子、仲間恵子、當山奈那、ハイス フェンデルルベ、山極海嗣で研究をすすめている。

琉球全域から選定した 97 の方言について、アトランダムに選択した 72 単語を音素に分け、その音素を構成する素性毎に 0 と 1 で数値化して繋げて、Neighbor-net と Neighbor-Joining で系統樹を試作した。なお、語根の異なる語は別シートを作成して統合した。音素素性を数値化して作成した系統樹が一定程度の有効であることを確認した。

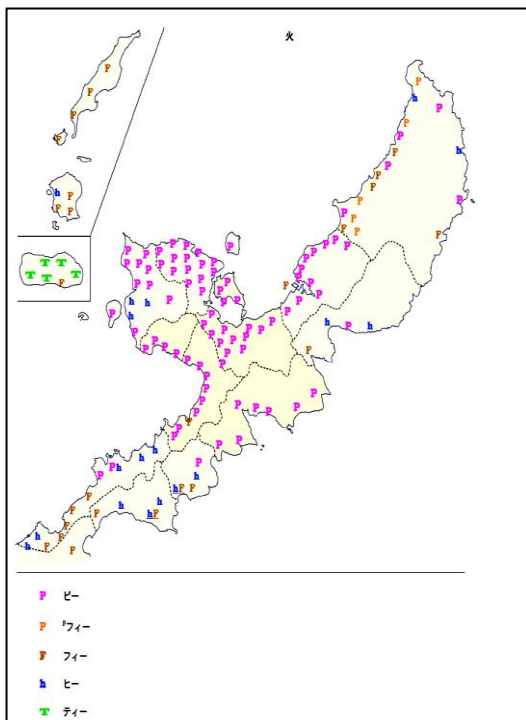
72 単語を用いた Neighbor-net と Neighbor-Joining 系統樹



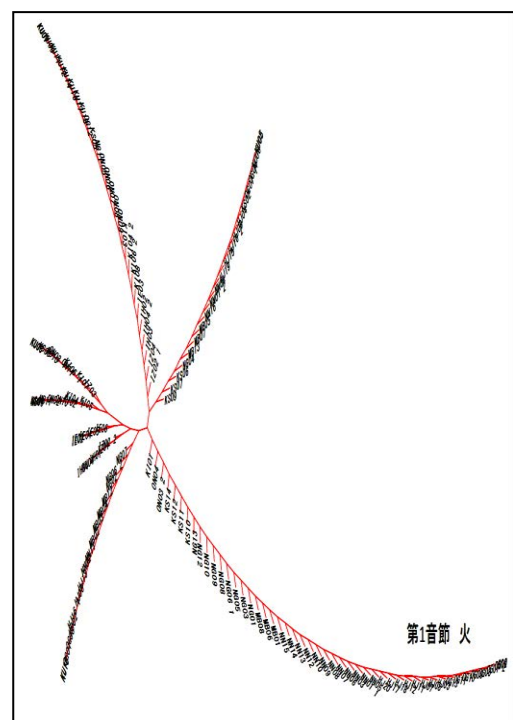
今は、これまでの琉球語の音韻研究の知見と言語地理学的研究の成果に照らして、音素素性を数値化した系統樹の有効性や音素素性の数値化の方法の適否、および系統樹作成の方法を検討を進めている。一つの音素は素性の束として、単語は数値化された素性の束の連続体として表される。音韻変化はその素性の変異として表されることになる。音素を素性に分解して描いた系統樹は、単語の外形を形つくる形質による系統樹である。琉球語には、母音1個から成る単語の数が少なく、子音と母音の結合した音節を複数個繋げた単語が圧倒的多数を占めている。音素素性を数値化した手法なら1単語でも系統樹を描くことができる。

単語1個を数値化して描いた系統樹は、祖形から個々の下位方言の語形が生成されていく過程を描いたものである。1単語系統樹の樹形は、祖形から変化していく過程を表している。1単語系統樹は、特定の形質で描いた系統樹である。その1単語系統樹が何を表しているのか、慎重な検討が必要である。なお、前後する音素の韻質の違いや語頭・語中・語末の単語内での位置の違いなどの音環境を問わずに起きる音韻変化もあれば、限定された条件・音環境のもとで起きる音韻変化もある。 $*o > u$ のように琉球語全体で起きた音韻変化もあれば、 $*p > h$ のように離れた地点で並行的に起きる変化もある。今はこれらを等価に扱っているが、広く起きる変化と稀な変化に重みづけを行ったり、系統樹を作成するのに有効な単語の選定を行ったりしなければならない。恣意性をできるだけ排除した形で作成できるようにすることに努めている。

「火」の語頭音の言語地図



「火」の語頭音の分岐系統樹



音素素性による1単語系統樹の有効性が確認できれば、複数単語を統合した系統樹にどの要素が効いたかを検討できる。自由に選んだ単語を組み合わせた、単語をあれこれ入れ替えながら、複数の単語を繋げた系統樹が作成できると考えている。

7. 特性の異なる系統樹

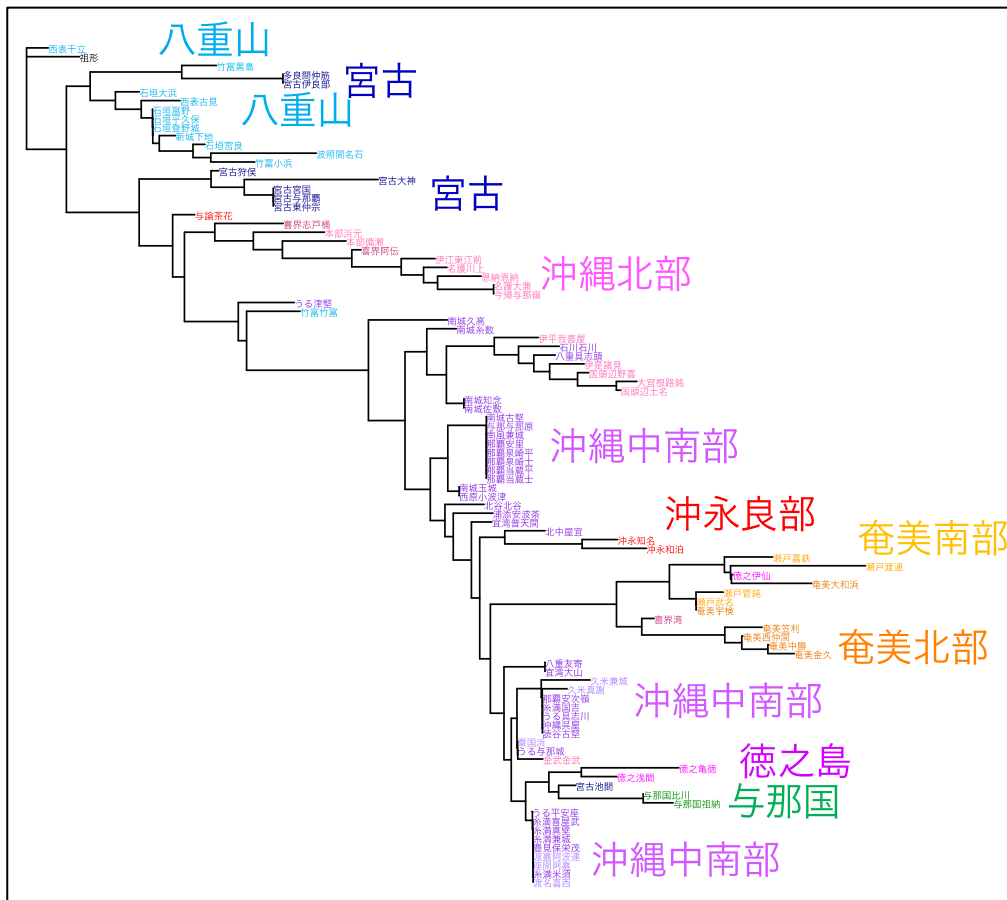
言語には音韻、文法、語彙の三つの側面がある。音韻と文法と語彙は、言語的特性が異なる。し

たがって、音韻で描く系統樹と語彙で描く系統樹と文法で描く系統樹は、異なる樹形を描くことも予想できる。

異なる系統属性に着目した系統樹が描ければ、音素別、意味分野別、文法項目別等、目的に応じて選定した複数の単語を組み合わせて系統樹を作成できる。音声形式による系統樹だけでなく、文法形式の用法や意味を構成する素性ごとに数値化して系統樹を作成し、それぞれの系統特性を解明しながら重層的な変化過程を可視化させることもできる。

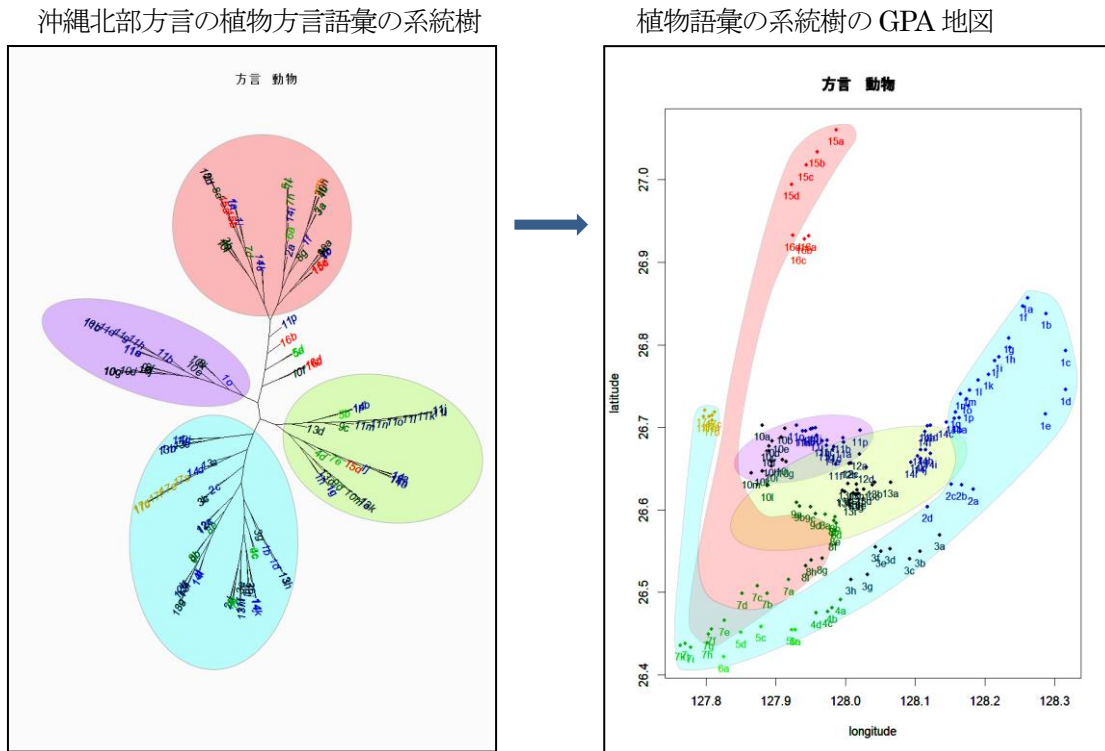
日琉祖語の *p で始まる単語を組み合わせたたり、*p を含む単語の語頭の音節だけを組み合わせたり、同じ母音を含みながら先行する子音を取り換えた音節を組み合わせたりできると考える。

日琉祖語の *p を語頭に含む単語の有根系統樹



借用語の導入や置き換えが少ない基礎語彙にあつて、人間関係・親族名詞は、身体名詞や他の分野の名詞より地域的な変異が大きい。また、人間関係・親族名詞のなかでも呼称としても名称としても使用される親族名詞は、名称としてしか使用されない親族名詞より地域的な変異が大きい。その語形の変種は地域的なまとまりを作ることが多い。親族名詞は、男女、父母、祖父母、兄姉、叔父伯母のようにペアをなす小体系をつくる。人間関係・親族名詞の個々の単語が描く樹形、男女のペアのような小体系の語彙の描く樹形、より上位の小体系が描く樹形、人間関係・親族名詞の全体が描く樹形を総合的に検討することができる。身体名詞のなかでも頭や顔や顎は、鼻や耳や目よりも変異の幅が大きい。形容詞は動詞より語形の地域ごとの変異の幅が大きい。意味分野別の系統樹を作成して分野毎の系統特性を検討し、その重層性を反映させた総合的な系統関係を探ることができる。ただし、そうやって描かれた系統樹が何を描いているのかは慎重な検討が必要であるのは言うまでもない。

描いた系統樹の端点を GIS データを用いて地図上にプロットして言語地図を作図すれば、言語地理学の研究成果に基づいて、系統樹の適否を検証することができる。さらに、言語系統樹をもとに作図した言語地図は、言語地理学に三次元的な視点を導入し、琉球語が日琉祖語、九州琉球祖語から分岐し形成されてきた歴史を時間と空間の三次元の座標軸上の動態として表現する。その言語地図には、1 単語の言語地図だけでなく、目的に応じて選定した複数単語で描いた系統樹から、言語の小体系を言語地図に描くこともできる。そうやって作図された言語地図は、より総合的、構造的、体系的な言語地図になる。



8. 方言と民俗文化

沖縄本島南部方言は、全体として方言差の小さい方言だが、島尻西部方言と島尻東部方言に区分される。島尻西部方言は喉頭音化した接近音 ʔj 、 ʔw を有しないが、島尻東部方言は喉頭音化した接近音 ʔj 、 ʔw を有する。また、島尻西部方言では「兄」をアイヤーといい、島尻東部方言では「アッピー」や「アフィー」という。沖縄本島南部方言は、音韻の特徴によっても語彙の特徴によっても東西に区分される。

島尻西部方言の話されている地域は、現在の糸満市域に重なり、『おもろさうし』の巻二十「こめすおもろの御さうし」の区域とも重なる。島尻東部方言の話されている地域は、現在の八重瀬町、南城市と重なり、巻十八「しま中おもろ御さうし」、巻十九「ちぬねんさしきはなくすくおもろ御さうし」の区域と重なる。考古学者の安里進（1990）は、グスク時代の土器胎土の地域色から沖縄本島南部の島尻地域を、B類主体圏とA・C主体圏とD類主体圏に区分している。そのA・C主体圏が島尻東部方言の分布域に重なり、D類主体圏が島尻西部方言の分布域に重なる。

グスク時代の地域区分がおもろさうしの編纂された時代の地域区分に引き継がれ、それが現在の方言の地域区分に引き継がれているとみることができる。島尻西部方言と島尻東部方言の区分の起源がグスク時代まで遡る可能性があるとするなら、他の地域の方言区分、例えば、沖縄北部方言の区分が琉球国期の行政区分の間切に一致するが、その区分もグスク時代に遡る可能性がある。

仲宗根政善（1937）によると、沖縄本島の中ほどの自治体である恩納村から北の地域の動詞連体形の語尾には **nu** が現れ、南側の地域には **ru** が現れる。**nu** が現れる地域には、「アシャギ」とよばれる集落の祭場に設置された建築物がある。**ru** が現れる地域ではアシャギは屋敷内の別棟の建築物である。連体形語尾の分布とアシャギという建築物・民俗文化の分布の重なりは、何らかの文化圏、方言圏の存在を仮定できる。

奄美・徳之島地域は、母音体系、子音体系の共通性を有する方言圏を形成し、奄美德之島諸方言として他の琉球諸方言から区分できるが、これらの地域には「八月踊り」とよばれる共通の芸能がある。いっぽう、沖永良部島、与論島、沖縄島北部地域には、ウンジャミ・シヌグと呼ばれる祭祀がある。そして、沖永良部島、与論島、沖縄島北部地域は、言語的に共通の特徴を有する。

言語も民俗文化も地域の人々と密接に関わるものだ。方言区分と民俗文化の区分が重なるばあいもあれば、ずれることもある。その重なりやズレは何に由来するのか。人の移動や文化接触、言語接触が影響を与えているのか。方言区分と民俗文化の区分の発生は時代的にどれくらい遡れるのか。興味は尽きないのだが未解明である。

9. 方言系統地理学の可能性

音韻研究に比べると、文法研究は遅れている。伝統方言話者の高齢化とそれともなう減少、標準語の圧倒的な影響のもとでの琉球語諸方言の変容が進行し、琉球語の危機的な状況は深刻だ。琉球語の文法を総合的かつ詳細に記述することは、琉球語の継承にとって重要であることはもちろん、琉球語研究それ自体としても重要である。

閉じた体系をなす文法は、語彙に比べて保守的な傾向を示す。動詞や形容詞の文法的な形、文法的な機能や意味、格助詞やとりたて助詞の形式や多義的な意味を系統樹に描ければ、琉球語の歴史と琉球列島の地域社会が形成されてきた歴史の研究を一層精密なものにする。

琉球語の言語現象の分布状況と個々の方言体系の変異を言語系統樹と言語地図に描いて、言語変化のさまを時間と空間の三次元の座標軸のなかを読み取って研究できれば、琉球列島に人々が渡来し、分岐していくさまでなく、九州と琉球列島のあいだで、あるいは、琉球列島の島々のあいだで人的、文化的交流を続けながら発展してきたさまを解明することができるにちがいない。

人の移動、文化伝播を含めた琉球列島の発展の歴史、すなわち、琉球列島の地域社会が形成されてきた歴史を解明するには、歴史学や考古学や形質人類学、民俗学や民族音楽などの隣接科学の研究成果を援用しながら、琉球語研究を進めることも重要である。そのような総合的学際的な研究を、生物系統地理学に倣って¹⁰、方言系統地理学と呼ぶことができるかもしれない。方言系統地理学は、言語学を中心にしたものだが、歴史学や考古学や形質人類学、民俗学や民族音楽などの隣接科学との学際的な研究でもある。

付記：本稿は JSPS 科研費 17H06115（基盤研究(S)「言語系統樹を用いた琉球語の比較・歴史言語学的研究」、琉球大学学長 PI 研究「琉球諸語における「動的」言語系統樹システムの構築をめざして」の研究成果の一部である。

¹⁰ “生物系統地理学”は、分類学、生態学、系統学、進化生物学、保全生物学、多様性生物学、遺伝学、分子生物学と関わっている。生物系統地理学は、上の既存の学問の方法論を援用しつつ研究を進め、生物の空間的な分布について、その歴史的、系統的な側面を扱う。“生物系統地理学”の詳細については、ジョン・C・エイビス著、西田睦・武藤文人訳（2008）『生物系統地理学—種の進化を探る—』東大出版会を参照。